



於  
221  
53

東  
洋  
圖  
書  
室

禁

繪本通俗三國志六篇卷之三

目錄

魚腹浦八陣伏陸遜

白帝城蜀帝訖孤

曹丕大舉五路兵

繪本通俗三國志六編卷之三

魚腹浦八陣伏陸遜

蜀の大將傳形へ後より下りて追駆る敵を拒ぎけるが。吳の大勢四方を囲れ命をとどく戦ひまされば、吳の大將丁奉大立音あげてやけろゝ罵の大將死ともとの枝をうちも。降るゝの極て多く汝が主の玄徳もととて生取せられたり。汝あんじ早く降らざる傳形怒りてやけろゝともて乃ち漢の大將安んじて呉の大又降らんやとて鎧を脱げて大勢の中をかり破り力で奮てさんぐり戦ひ百余合よして圍み生ると能ざりけり。長く嘸じて口より血を吐き卒々乱軍の中みて切死みや。志たりける蜀の祭酒程畿へ

カド。一騎江の辺々走り。舟手の勢と下知と。敵に向へ  
やんともなく。呉の大勢力勝みの内で攻けられ。蜀の勢力四角  
八方々散乱と。手下の將士立音あげ。程祭酒いそぎ馬よ  
のりて。走りゆくと。よびりけと。程畿怒て。やけろ。君よ從て  
戦ひよ生るど。卒度も逃る。とほと。呉の勢力を。よ十  
重八重。と。自ら首を刎ぐ。死入りけ。蜀の先鋒  
張南へ。々々夷陵の城を囲んで。孫桓を攻て居けるが忽ち  
趙融馬と。と。死れて。城を打弃。帝を救ふと。進む不。呉  
張南又。も。どうも。城を打弃。帝を救ふと。進む不。呉  
の勢力と。と。攻め。孫桓城を。開く後より。やくり來き。と。攻け  
れ。張南趙融力を尽く。時移るまで。戦ひ卒よ生ると。克く

と。乱軍の中より死たりける。南蛮王沙摩柯。一騎江の邊を逃走りける。吳の大將周泰。追付し。引回す。三十余合戦ひ。卒々討きて死みけり。蜀の大將杜路。劉寧。手下の兵を引て降人となり。七百里があひどく奔たる。兵糧武器。とどく。吳の兵も敗けり。陸遜大勝利をもる。蜀帝。擒せんと。自ら大軍を率しく。飛びとく。追かけ已。夔閨のまえ。近付馬上す。向を望べ。山と傍江と臨て。一陣の殺氣。天を撞て。起り。乃ち諸大將を顧みて。すけろへ。是必を。敵の伏兵あらん。軽く。進む。うちとて。十里あまり。ひき退き。平野と生て。陣勢を張。敵の来ると相待ひ。まち。乍候の兵を遣して。行先のやうを伺ひ。程よく。回來り。す。

けろへよく。向の体で伺。敵へ一人も見えず。陸遜もす。  
と馬より下りて山の上あり。望見きて。殺氣凜として入る。  
さきよりよそて。人の内安らを。再び人を遣して。仔細えうる  
が。深らむる。その人回り来て。さくよ一騎の影も見えず。  
とやまと。陸遜によく怪し。日の傾よ。志なげて。殺氣志がひよ加  
りけまべ。猶預して。定らを。又人を遣して。さくよせむ  
る。その人回り来り。江のちとす。大ある石八九十乱をちりて。  
人へびとりも。人びひと答。陸遜。あみのふと。石の堆。よ  
し。江の邊。又亂きたる石の堆。まへ。ひうちゆ。ぞと。問。す。人  
あまえて。曰く。先年。諸葛孔明。蜀の國。入る。兵を駆て。あ  
ふ來り。石を推して。沙の上。陣勢をあらわひける。常。雲。

どくある。氣起る。人の舌。東腹浦と。や。不よくて。陸遜。を。と  
きのて。卒。馬。打乘。枚十騎を。引て。坡の上。立。石  
陣。と。る。四方八面。もぐく。門戸。あつけ。と。冷笑。ひ。や  
けろ。され。人を。惑。との。術。ち。なんの。益。あらん。と。五六騎  
を。引。て。坡。下。直。石陣。中。到。り。膳。と。と。と。伺。ひ。と  
る。手下の大將。告て。曰く。日もと。で。暮。夕。都督。を。く。回  
り。陸遜。さ。と。て。馬。回。て。止。と。と。と。忽。然。と。と。と。在  
風。起。り。砂。飛。し。石。走。ら。天。地。湧。更。変。化。て。怪  
き。石。城。と。と。と。尖。と。劍。の。と。と。岸。拍。波。福。と。と。と。鼓。乃  
音。喊。の。色。異。あ。う。ざ。り。し。く。陸。遜。大。と。と。と。と。と。孔。明。  
計。と。中。も。と。い。と。と。き。と。と。と。と。と。乱。石。路。る。



よまともとて。土へきよも。あくけど。如何せんと。どうく  
不よ。一人の老翁忽然として。生来り。陸遜が馬の前より立  
笑ひて。ナリ。將軍たの陣を。生へと。ありひゆ。陸遜  
曰く。ねぐらち。老翁よきを引て。生へ。老翁さあへ  
ち。杖を推ろて。志がくと。生けろよ。余人の碍もある。易くと  
引て。生けよ。陸遜曰く。老翁へ。いろちる人。ぞ答て。曰く。  
老夫。それも。黄承彦。先年某。嫁諸葛孔明。蜀  
の國へ。入る。その石を。排へ。陣勢を布。八陣の図と  
名く。此乃ち八門遁甲の。休生傷。杜景死。敬馬閑を。按へ。く。  
毎日毎時。變化。たると。端。十万の精兵。又比を。孔明別  
れ。よ臨んで。某。ナリ。後。吳の國の大将。たの陣。又入て。迷へ。

うもうちも。引て。生を。あといひける。が。某年。老て。あの山。隠れ。專  
道義を。學。不。今日。岩の上。す。埋。を。將軍。死。門。す。陣。中。ユ  
ヘ。ナ。うもうちも。陣法。を。あ。り。ゆ。へ。ゆ。や。の。あ。ら。ん。と。あ。ゆ。り。や  
久。く。ゆ。そ。古。く。黒。く。迷。ひ。く。り。某。坐。ら。視。み。志。の。が。生  
門。よ。引。生。せ。り。陸。遜。曰。く。老。翁。た。の。陣。を。習。ひ。く。る。黄。承  
彦。曰。く。変。化。無。窮。と。學。と。あ。と。た。陸。遜。う。り。馬。よ  
下。拜。謝。と。回。り。け。と。諸。將。ミ。あ。曰。く。あ。の。人。ハ。孔。明。が。勇。男。ハ  
エ。殺。を。と。諸。葛。孔。明。ハ。真。の。卧。龍。と。よ。と。され。又。及。を。ざ。と  
て。ま。よ。軍。を。收。ら。て。國。よ。回。り。け。と。諸。將。問。て。曰。く。界。の。勢。え  
と。ぐ。く。滅。ひ。て。白。帝。城。よ。逃。集。る。宜。く。勢。ひ。よ。の。り。て。討。破。ゑ。き。

今石陣せきぢんを立てたり。まことに。何ゆべ。陸遜りくそんが曰いふ。石陣せきぢんを怕おそれて。退のく。あらざ。察さつちる。魏いたずらの曹丕さうひ。奸雄かんゆうの計けい。又曹操さうそう。おとらし。今味方みわがたの討勝とうしようたるとき。必ひさ。我わら。ホホ。追お。荒あら。遠とお。蜀しょくの國こく。討とう。全ぜん。回まわ。是これと。拒きか。人ひと為ため。アリ。とく。虛きよの。の。而が。吳ごの國こくを。あ。そ。ぞ。と。も。是これと。拒きか。人ひと為ため。アリ。とく。一人ひとりの大將だいじょうを。残のして。後うしろ陣じんを。守まらせ。自まら大軍だいぐんを。引ひいて。忍しのび。とく。回まわ。け。ヨ。バ。案あんの。とく。い。ま。ど。二。日。と。と。だ。ざ。る。三。方。よ。り。早馬はやま。き。たり。魏いたずらの曹丕さうひ。大軍だいぐんを。三路さんじゆ。分わけ。ち。曹仁さうじん。ハ。濡須にぬす。よ。り。キ。ラ。ミ。曹休さうきゅう。ハ。洞口どうこう。す。曹真さうしん。ハ。南郡なんぐん。よ。り。發は。し。その勢せいを。あ。雲霞段うんげきだん。の。と。く。吳ごの國こく。向むか。と。告こ。け。ま。ハ。陸遜りくそん。大。笑わら。い。て。曰いく。あ。我わ。が。計けい。不ふ。又。出で。ま。ヨ。リ。コ。ミ。チ。の。備そなへを。あ。サ。と。と。大。將

と。分わり。て。拒きか。し。

白帝城蜀帝託孤

章武二年夏六月。吳の陸遜。蜀の勢せい。而が。猇亭。夷陵の地ち。破はり。け。且また。巴帝ばてい。ま。ぐ。又。打うち成なまき。趙雲ちょううん。が。救すく。て。得とく。ま。ぐ。白帝城はくていじょう。入いら。せ。り。よ。ハ。馬良ばらう。鹿ろく。が。とく。み。そ。せ。来き。り。已い。よ。味方みわがたの。破は。き。た。る。よ。と。て。後悔こうひ。と。く。已い。よ。孔明こうめい。が。言い。そ。と。か。て。逐一帝いつくじ。奏ささ。け。と。帝だい。嘆のか。て。宣あく。朕しん。も。や。く。丞相じょうしやうの。諱いみ。を。き。ぐ。今日の。敗軍ひぐん。へ。致いた。を。ほ。何の。面目おもて。あ。う。そ。成都せいと。又。回まわ。り。く。群臣ぐんじん。又。對面たいめん。せん。と。く。白帝城はくていじょう。を。あ。り。た。ら。て。永安宮えいあんぐう。と。号くわ。し。御駕ごか。や。駐ま。て。都と。又。回まわ。り。も。を。馮習ほうし。張南ちやうなん。傅彤ふとう。程畿き。沙摩さま。柯こ。ホホ。ミ。あ。敵てき。又。討とう。と。き。ち。く。と。く。ベ。哀あ。ミ。哭こ。ま。す。の。不ふ。近臣きんじん。

奏へて曰く。舟手の大將黃權。江北の勢を引て尽く。魏降  
れり。陛下を妻子一族を誅して。その罪を正す。帝宣  
ひけろ。黃權吳の兵を隔てられ。江北の岸もありて。飯をうんと。  
ちゆうとうと路をく。已てを得ぞして。魏を降まう。朕黃權  
を負けり。黃權が朕を負ふあらを。あんぐ其妻子を罪  
せんとて。黃權が家々初のどく。俸禄を賜て。妻子一族  
を娘ひす。まのとを。黃權へ舟手の勢力を引て。魏を降りて。  
曹丕を見けり。曹丕が曰く。汝今朕を降る。陳平韓信が  
古の名を慕はんと。ものをうる。黃權涙をあがめて。下りて。  
臣々。蜀帝の恩を被り。殊遇をあへど厚く。臣々大將  
とへて。江北の勢力を督しむるある。吳の大軍を路を塞ぐ。

飯をうきゆうあく。あくを來りて。陛下を降る。敗軍の將二死  
と免れ。幸く安んじ。あへて古人をと慕ひ。曹丕をとも  
と喜んで。鎮南將軍を封づけ。黄權固く辞して。受  
を。とひよ近臣奏へて曰く。只今蜀中より。細作回り。黃權が魏  
を降る。蜀帝怒りて。その妻子一族をうそと尽く誅  
し。と報じ来り。黄權あとときいてやけろ。臣久く蜀  
帝を事誠の心を推て。疑ふて。何ぞ臣が一族を殺す  
心か。と虚説あらんと。ひけり。曹丕がすもと同一。賈翔  
やへて。やけろ。朕天下を一統せんとも。まだ蜀と取べき。先  
吳を取べき。賈翔が曰く。玄徳が雄才ある。更に孔明と  
て。蜀の國を保へ。吳の孫權へ長江の險をよりて。陸遜兵



と要害を屯す。とあ軽く計る。臣よく諸の大將をそ  
と。玄徳孫權の敵を伏せたのは。あれども陛下の天威。卒  
へ。天下と一統志す。只よく國を守りて。吳蜀人のふきとを。  
同ひ虛の内で伐り。曹丕曰く。朕もとて大軍を。三路に分り  
て。直に吳の國を攻へ。と。あく勝ざるの理あらんや。尚書  
劉曄。諫て曰く。近比吳の大將陸遜。蜀の七十万騎を打破り。  
上下もて齊り。さも江湖の險阻を保り。倉卒に破  
り。と。曹丕曰く。汝をもとへ。吳を攻よと。今又  
諫むべあゆ。と。劉曄曰く。時も同うざることあり。前より吳  
の兵もと。蜀軍も破られ。と。勢ひ漸く危殆しつ。陛下  
も攻ま。一鼓して破る。今陸遜蜀軍を破りて。銳氣日

比ひ百倍せり。あよびのりて。勝て得ゆ。と。曹丕曰く。  
朕が意をとどめ決せり。卿再び諫むるとあられとて。自御林の  
軍を起して。三方の味方を接應。と。劉曄又曰く。吳の勢をと  
え備をあつて。大將呂範。洞口を生て。曹休を拒ぎ。諸葛  
瑾。南郡を生て。曹真を拒ぎ。朱桓。濡須を守りて。曹仁  
を拒ぐ。三路の味方。いまだ利からず。陛下もから向ひよ  
とも。必ずとどけら。回りの人に。諫やけし。ども曹丕も  
これを用ひ。と。去程。吳の大將朱桓。濡須を守て。陣をと  
ける。曹仁が大軍。羨溪を攻る。よし。手の勢を。  
尽く。羨溪を分ち遣し。自ら五千余騎を率いて。濡須乃  
城を守る。あよ。忽ち曹仁が大將常雕といひ。の諸葛慶。

王雙と五万余騎みて寄ると告げ。諸軍もあ怕る色あり。朱桓とたゞ年二十七歳うち。極て膽量ありけり。大將として曰く。凡そ兩軍相戰ふ勝負へ大將もあらず。士卒もあらず。勢の多も少とも汝もちへぞ。怕るべき。兵法も客兵倍而主兵半者主兵尚能勝す。客兵より兵の平川曠野もあらず。掛合の軍もあらず。今曹仁をもとよ。本より智勇の大將もあらず。況や千里の路をきたりて人馬とりよ疲る。余はよ引て山上の城を守り。南へえある江又臨。北へ險き山を負ひ。逸をゆりて勞て待百とび戦ひて。百とび勝の勢ひ。曹丕がくら来るとも。あんの怕り。あらんと。旗をませ鼓を息。人あき体みえせて居たりけり。魏の先陣常雕

精兵を引て寄来る。朱桓へ鳴ておがひて。音もせぞ敵をぞ。門外まで近付けると矢倉の上より一色の鉄炮をあじ。色の旗を一度まさりと。さてあげて朱桓と一騎馬を飛と。討て生常雕とたゞ。三合あらざる。馬より下より転て落と。吳の勢もとよ氣を得て。一度より城中より突上り短兵まぢよ。斬てまへりけり。魏の大勢尽く乱と。討るのみ夜をさら。谷の底より落まれ入馬いやが上より重り死と。朱桓打て。よせ来りけり。吳の勢却て。羨漢より殺生と。そんぐに。勇喜文不。曹仁へ右より志らぞ。後陣の大勢を引て。よせ来りけり。吳の勢却て。羨漢より殺生と。そんぐに。打破る。よしよよりて。此手の寄手へ叶をとて退き。魏主曹丕を見て。右の由を告げ。曹丕もどろく不早。

馬急を告て曰く。曹真。夏侯尚兵を引て。南郡を攻る。不す  
陸遜内に伏せ。諸葛瑾外に伏せ。夾んで攻ける。味方打  
負て退きたり。その言ひまど果ざる。又早馬到来。曹休  
兵を引て洞口を攻る。呂岱計をよりて散  
ぐ。ふりけ破り。味方あびて。討となと告げれ。曹丕三  
方の味方破れたるをまの。喟然として長嘆。朕賈詧  
刻眸。練ときを。果して。大の敗とて。取りといひて。時  
冬。天の暑氣あみて。疫疾行しけれ。卒々軍を收て。洛陽  
又回り。されより。呉の國と又不和。そのとた蜀の帝を永  
安宮。御坐ありて。御心地煩く。群臣は對面せんと羞  
て。成都へも坂らせり。章武三年夏四月。及んで御惱

志がり。又重く。关羽張飛を哭きゆひ。病をとど。四肢入り。  
兩眼やうやく。昏して。近侍の人をも。見る。と厭せり。  
あり夜あたりの人を退けて。ひとり龍床の上に卧り。本  
よ俄々陰風聴く。燭火とも。滅へとて。復明。また  
見としむあらじ。二人御傍立けり。帝怒いて。宣く。朕  
人の内。惱乱。汝おもあづらく。退けといひ。罵り。又来れ  
る。早く退けと叱り。人をも。その人をも。生ざりけり。帝  
げり。傍ある斧をとり。起て。あきこむ。火燈の影。幽う  
くて。关羽張飛。二人忽然とて。侍り立。帝も。どうひく。二人  
の弟あて。との世。又あくと宣へ。を。关羽やり。臣へ。今生の  
人。又あらず。乃ち。眞途の陰鬼。あり。平生信義を失ひ。ゑ

セウリテ天帝勅して神とあたり凡も二人の弟と近き内  
ム會へ。のん帝ありて聞て哀と哭き忽然とて散馬き  
覺あたりセニタドモ二人の弟もそんざうけもべまくシ  
人をやしく時刻を同キ。三更ちりと答帝嘆て宣く  
朕の世又在と。久わらずまどと急々成都と使をさせ丞  
相孔明尚書令李嚴。永安宮と招き。孔明勅をう  
けまへり。太子劉禪を成都と残し。留る魯王劉永梁王鄧  
理二人の皇子を伴ひ奉り永安宮と來て帝の已と危く成  
りよせて。龍床の下と拜哭しけり。帝近臣と轍へ孔  
明と龍床の上と坐せしら自らその背前と撫て宣ひけふる。  
朕巫相を得てより已ニ帝業を成工を得たり。何ぞ期せ

人。智術浅陋と丞相の諫と用ひ。自ら浩る敗と取  
んとする人の。成都と回て丞相と向て對せ。とて養ふ  
れども今日病と。危い。あく丞相と請く。後の大事と託せ  
ざふと。得人やと。御涙もむせび。人を孔明も涙とあ  
て曰く。承る。陛下と龍体と保りて。天下の望と副え。帝  
傍と。と。馬良が弟馬謖。床の上とありけ。近侍乃者  
て。全くあらざと。又孔明を坐せしら。丞相常と馬謖が才と如  
何。あく。と。問す。孔明答へ曰く。たの人に當世の英雄  
帝宣へ。あらざと。朕の人をそろ。言ちの実。ふとぎたり。ふ  
らを。大。又用へ。うらざと。丞相と。と。察せよと宣へ。又誌  
臣と。殿中と。紙筆を求めて自ら太子へ。遺詔を送り。し

張飛魂



關羽鬼



蜀帝

蜀帝の夢よ  
兩人の山弟ふ  
會す

孔明又むろりて宣ひけろへ朕書と読むと。粗大畧を  
きく。聖人の曰く。鳥之將死其鳴也。哀人之將死其言  
也。善と。朕もと汝ホと共。よ曹賊を滅ぼし。漢室を興さ  
ムとも。不幸ム。卿ホと中道より別る。亟相の遺  
書と。劉禪又送り與。よ尋常の言とあらじ。むろとある。尤  
ニ事と。ぐきを教よ。孔明ホと。地を拜泣して。曰く。願く。陛下  
龍体を重ん。大臣ホ尽く。大馬の勞を施して。陛下知遇恩  
を報き。帝又孔明を扶け起。一の御手。ハ族を掩  
ひ。一の御手。ハ。肩を撫。朕今死。一大事の一言あり。亟相  
み告。と。宣ひけ。孔明曰く。陛下休。ひ。隠。す。よと。あ  
く。あきらかに語り。帝の宣く。君才。才。曹丕。十倍を。必び

よく。那を安んじて大事をあさん。は太子劉禪輔。く。ん。を  
あ。ち輔。け。不才。う。輔。べ。う。り。ぎ。ん。を。君。ミ。川。蜀の主とあれ。  
孔明。あ。き。を。ま。い。て。遍。身。を。汗。を。あ。手。足。措。不。ぞ。う。志。あ。ひ。地  
の上。拜泣。と。臣。安。ん。だ。あ。く。て。股肱。を。盡。す。の忠貞の節  
を。效。と。あ。と。継。死。と。以。せ。ざ。り。ん。や。と。く。頭。を。ゆ。内。て。地  
を。叩。き。両。眼。より。血。を。出。け。と。ベ。帝。又。孔明。を。龍床。の上  
を。坐。せ。し。や。魯王劉永。梁王劉理。二人を。や。と。宣ひけ。再  
び。坐。せ。し。や。不才。う。輔。が。言。セ。記。せ。よ。朕。死。と。後。の。再。兄弟。ミ。あ。丞。相。セ  
父。と。と。急。る。と。あ。く。あ。き。事。よ。が。一。急。る。と。あ。ら。ベ。天。人。と  
カ。又。誅。し。て。不孝。の。子。た。る。と。ベ。又。孔明。又。むろり。て。曰。く。亟。相  
坐。せ。よ。朕。が。子。再。拜。し。て。父。と。と。と。と。二。人。の。皇。子。を。命。ト。

て。梓せきせきひけりべ孔明が曰く。臣肝腦地々塗るとも鳥  
ぞよく知遇の恩にて報むることを得ん。帝李巖々向ひて宣く。  
朕をぞよし孤を丞相又託を汝大うふらを。憲るとあられ。ま  
趙雲々むろへ宣く。朕は汝と卿と患難の中々相従ひて久  
く戎馬の間々奔走ち。あんぞ期せん。との地々別とくとく卿  
朕が故き交をあゆひ早晩幼子を顧て。朕が言ふ負とあられ  
趙雲地々拜哭して曰く。臣猶かくも犬馬の勞を效す。社  
稷を扶けん。帝百官を顧て宣ひけり。朕一く付囑する。と  
あこへを。とあさく保愛せよとく忽然とく崩ドタ入りとた  
み聖壽六十三歲。章武三年夏四月二十四日あり。文武の百官  
かすく哭き孔明太梓宮を奉つて。成都々回りけり。太子

劉禪城を坐て。とくとくひく靈柩を正殿の中々安へ。哀  
痛して祭をあつた。遺詔をひらき。そよ。そよの詔を  
曰く

朕初得病疾。但下痢耳。後轉生難。病殆不自齊。朕聞  
人年五十不稱夭壽。今年六十有餘死復何恨。但以  
卿兄弟為念耳。勉之勉之。勿以惡小而為之。勿以善  
小而不為。惟賢惟德可以服人。卿父德薄不足效  
也。卿與丞相一從事々之。如父勿怠。勿せ心。卿兄弟更求  
聞達至囑々々

群臣遺書を読しけりべ。孔明をあち上言して曰く

伏惟大行皇帝邁仁樹德。西復壽無疆。昊天不弔穴寢

疾篤留今月二十四日奄然升遐臣切號咷若喪考妣乃顧遺詔事惟大宗動容捐益百僚哀憫三日除服到葬期復如禮其郡國太守相都尉縣令長三日便除服臣亮親受敕戒震畏神靈不敢有違臣請宣下奉行

孔明百官であるらて曰く國一日も君あくんをあくべりうき早く太子也帝位も即奉り漢の正統を継ぐもとて劉禪也皇帝の位も上せ章武三年也建興元年ももとてむ劉禪字は公嗣とたゞ御年十七歳孔明也尊んで丞相武鄉侯も封ト益々の牧を領せしも後八月も先帝も惠陵も葬りて昭烈皇帝と謚し吳皇后也皇太后もとて養老宮も入り甘夫人

セ昭烈皇后と謚して天子大赦も行ひ國中一應の事務を  
あ孔明も任せゆ

曹丕大兵五路兵

蜀帝已も永安宮も崩御も入る而魏の國もきりけり。曹丕喜んでやけろへ玄德もも死せり朕又あんの憂あらん。その國中主あきよのりで早く大軍も起じて滅をべ。賈翔諫めて曰く玄徳もも死せども必ずヤセども必ず孤をもすらき力も竭じて幼主も扶けん陛下もしく伐すとあられとだふ人ともも生笑ひてやけろへ。その時もりて。馬と伐ざるを何との時も期もべきぞ諸人もとてよき。

河内温城の人。司馬懿字仲達。曹丕曰く汝り  
あり計ある。司馬懿曰く。臣たゞ中國の勢を起さ。急  
ニハ勝てを得ド。内外より來さんで攻るの計を用ひ孔明  
ニ首尾相救と克ハざらしも必を。大なり功をあさるを。  
うちく五路の大軍を起して。曹丕向て曰く。五路とある。そ  
司馬懿曰く。遼東鮮卑國へ使をさせて。國王軻比能。金  
帛を送て。ものんこむと。遼西羌胡の勢十方を起して。  
陸路より。西平閑を攻取して。また一路あり。又南蛮国  
へ召簡を送り。國王孟獲。又恩賞をもとめて。十万の蛮兵  
を起す。益々の永昌。梓柯。越雋。華の名を攻させ。蜀の南  
を伐して。又二路あり。又吳の國を使を遣し。地を割く。隣

好ともとんと約す。孫權。三十万の勢を起して。兩川。峽口を  
攻させ難所。由て。たゞちよ涪城を取して。それ三路あり。そ  
降將孟達。又命じて。上庸の勢十方を起して。西の方漢中  
あり。攻入して。され四路。次々大將軍曹真。又大都督と  
一十万の勢を率して。京兆す。陽平閑を生て。直ちに蜀を  
伐して。され五路あり。その五十万の大軍。五路を分けて。進  
み。孔明。又太公望が妙才ありとも。安んじ。さとよ當ら  
ん。曹丕がだりあく喜び。察。又使をもせて。四路の兵を起させ。  
その後曹真。又大都督として。直に陽平閑を攻へ。そのの  
とた。張遼。徐晃。又。旧日の大將。又。別列侯。又封せら  
れ。冀又青。又合淝。六の城を守りて。差年を兼ねて。居たり



けろ。去程又蜀の後主劉禪へとてよ皇帝の位を即すと、  
り。旧日の功臣を封賞を加へ朝廷の政務へとあ。孔明が裁断  
する。任せらる。ヒルは皇后ひまど立さりけど、孔明百官と相  
議。上言して下りる。故車騎將軍張飛が女をあつて賢  
徳ありて、年十七歳あり。うそとて皇后よ備よと。卒。張  
飛が女と正宮より、引とへる。建興元年秋八月、近  
臣禍と告げられ。今曹丕五路の大軍を起して直よ  
蜀と取ることも。第一路は遼東の軒比能。西平關を犯り。第二  
路は南蛮王孟獲。益々の四郡をもそひ。第三路は吳主孫權  
也。口より兩川を入り。第四路は友將孟達。上庸の勢を起して。  
漢中を犯す。第五路は曹真と大都督として。陽平關を犯す。

む。大の五路の勢都合五十万余騎あり。孔明又告んとらを  
る。ひうあり故あらん。孔明叔日朝又生りて。後主さと聞て  
大又おどろき行あがきて背を決し。いそぎ巫相の府下。使と  
遣して。孔明を朝えり。いそぎ巫相の府下。使と  
巫相近比病を受て。いきやせども。朝えり。巫相の府下。奏され  
べ後主はく。怡とおどろき。黄門侍郎董允。諫議大夫杜瓊  
二人を巫相の府へ遣し。直に孔明が床の下へ到りて。まづ  
を告知へよと。宣へた二人。敕を秉り。巫相の府へ入らんヒ。  
されども門を守る者の堅く拒んで入とを放さざ。杜瓊  
大音あげ先帝危きよ臨んで。猶を巫相へ託す。今  
主上をじめて。宝位を即のう。魏の曹丕。五路の兵を起し。

境を侵と。事とで急ちう。丞相いうあひべ病と託す。  
て。生えへどりと。よがりけゑべ内より人生てゆけゑ。丞相  
明日早天と生て都堂と事と。議せんとも。生えらく御回  
日百官と伴ひ都堂ときたりて孔明今や生ると相待。あ  
いなす。暮とまだと。更と生えりけゑべ白官とあ怨せ。ふ  
くんで退散と。次の日早天と後主朝と。生えひまわらべ杜  
瓊列と生て曰く。今事急と。丞相さらみ朝せむ陛下  
自ら御駕と極て丞相の府と御行。親く計と問う。後  
主さとみ從ひ百官と。まば養老宮と。入り吳太后と。已  
て。右の趣きを告う。太后おどろひて宣ひけゑ丞相いろ

おとと先君の遺教と負ける。自ら行く。丞相とまのゆ  
告ん董允奏して曰く。太后うるしく生ゆてあられ。臣量  
と丞相うちも高明の計とあらん。太子まば御幸あらん。若  
叶とんを太后又太廟と生て孔明とやしよ。直ととのゆと  
問う。太后と云ふ。またがひたり。後主御駕と狂て直と丞相  
府と。守るゆのども。全く地と拜伏と。後主  
問て宣ひけゑ丞相へ何と云ふ。門吏答て曰く。何と居  
まつとも。更とまらを。只臣ホと余と。固く門と守り。百  
官と内と入と志むるとあられと云えり。後主とあら車  
す。下て歩行してひう第三重の門と入を孔明と。入  
竹の枝と倚池の邊と立て。魚と居り。後主や々々と

後より立りて丞相安樂ありやと宣ひけり。孔明後を入り  
みて。又、又、罵き。杖ともとも。地も擲伏す。後主答礼して宣ける  
は。今五路の兵境を犯して。事もあつて急ちう。丞相もあつて故  
に。府上も坐して事も議せざる。孔明笑ひて。後主と詣どく。内  
よびり奉りければ。後主の内にまどり安らぎを。孔明奏  
して曰く。五路の兵境を犯す。臣あくまで是をあらざるべき。  
今池の辺にて魚をえろり思ふあるゆ人あり。後主宣へ  
して。その禍を避へん。孔明が曰く。臣計を定て。軒比能孟獲  
曹真孟達の四路の兵を。もとで退けとり。只、吳の孫權を失  
りぞくべき計あつりしよ。まことに。安ド止せることあり。舌のまこと  
う人を使とく。利害を観て。ありむけり。人を欲もれども。ひ

まど宜しく人を得ず。陛下もうちも。是を憂ひす。又。後主を  
ろひて曰く。丞相果して。鬼神不測の機あり。何ぐくも敵を退  
るの計をきく。孔明が曰く。先帝危々臨んで。陛下を。臣も託  
して。臣安んじ。暫くも怠らん。成都の百官もく。その職  
司と。亦兵法の妙と。あらゆる鬼神も測る。克を取ら。とく機  
とく。安んじ。他人も漏さんや。今遼東の軒比能。西平關を  
攻る。臣量み。馬超素より。羌胡の人を志す。羌胡の勢。み  
たゞ。馬超も。計を授け。まひく。西平關を守りて。四方の路を  
き。兵を伏せ。毎日勢を換て。あとと拒へ。羌胡の勢。順時  
に金銀礼物であるて。ひそむをべし。ひそむをへ精兵をり



孔明



孔明と  
御駕（後生）  
弘農府（後生）  
小御駕（後生）

て。大勢を拒む。の一路をあらむ。更る足を。又南蛮の孟獲が四郡を攻る。臣もと。檄文を飛し。魏延と計を授り。一手の勢を率して。左より出。右より入り。右より入り。魏延と計をあさり。南蛮の勢。その地の利を失ひ。惟一勇の力を特で。心をあはど。疑ひとあるを。必ず必をもて。進むと克ト。此の二路。夏侯と足がふく。又上庸の孟達。漢中より。李嚴と生死の交をむきだり。臣もと。成都を回ると。李嚴をとりて。永安城を守り。ひきより。臣もと。の脅筒を造り。李嚴を命じて。手書きを書せ。使をもと。孟達に送らし。孟達の書をとく。あらま。軽くと。進むと

あらま。の。中定らむ。虚病して。半途より退ふべ。此の三路。夏侯と足を。又曹真が陽平関を攻る。そのもへ究竟の要害あるべ。容易に破るべ。閔とあらざ。臣もと。趙雲と計を授け。きびしく。難所を守りて。坐て。戦ふことあるべ。む。曹真もと。とくべく。自ら退く。の。四路。憂る。足がゆども。方一不虞の失ちあらんと。と。怕れひそむ。閔と張苞二人。おのく。三方の精兵を授け。左右を分て。五方の攻口を教し。ものゆく。一人も此事を。志ある。の。たゞ。吳の孫權。兵を起す。と。ども。軽く。動く。若四路の勢。打勝て。蜀中もあはど。危きと。あらま。進んで。攻こうべ。若四路の寄手。打負べ。安んじ。もと。進ん。

臣量よ。吳主孫權へ必ず。曹不<sub>一</sub>。三度まで。吳を攻とり。怨て含で。この命<sub>は</sub>従<sub>は</sub>じ。志れども。一人弁舌の人を使ひ。呉の國<sub>は</sub>行<sub>て</sub>利害を説く。まば<sub>は</sub>呉の勢を。ありぞ<sub>う</sub>。四路の敵<sub>は</sub>あく。憂る<sub>は</sub>足<sub>だ</sub>。未<sub>だ</sub>呉<sub>は</sub>使<sub>を</sub>乞<sub>ふ</sub>。人<sub>を</sub>得<sub>た</sub>。臣深く<sub>は</sub>思<sub>ふ</sub>。陛下御心を。安ん<sub>だ</sub>。と。ひひけり。後主宣く。太后も自ら乘<sub>る</sub>。而て巫相<sub>は</sub>。そのみを問<sub>ひ</sub>。宣へり。今朕巫相<sub>は</sub>。祠<sub>を</sub>きみて。夢<sub>の</sub>初<sub>て</sub>覺<sub>ぐ</sub>。何<sub>の</sub>憂<sub>う</sub>あらん。とて共<sub>は</sub>役<sub>を</sub>盃<sub>を</sub>傾<sub>か</sub>け。酒宴休<sub>て</sub>止<sub>む</sub>。百官久<sub>く</sub>門外<sub>を</sub>立<sub>す</sub>。後主の顔色<sub>を</sub>喜び<sub>と</sub>含<sub>む</sub>。生ゆ<sub>く</sub>もとて。まあんの内<sub>を</sub>あゆく。疑<sub>ふ</sub>。後主御駕<sub>を</sub>促<sub>し</sub>て。還<sub>か</sub>幸<sub>る</sub>人<sub>を</sub>。孔明持<sub>り</sub>別<sub>き</sub>て。遍く百官<sub>を</sub>とる。一人天<sub>を</sub>仰<sub>て</sub>打笑<sub>ひ</sub>そ<sub>う</sub>。

ど吉<sub>よ</sub>古<sub>い</sub>び<sub>と</sub>あきらめのあり。孔明<sub>を</sub>と見る<sub>は</sub>義陽新野の<sub>人</sub>。又鄧芝<sub>を</sub>字<sub>へ</sub>伯苗<sub>と</sub>。漢の司馬鄧禹<sub>が</sub>後胤<sub>を</sub>あらち<sub>う</sub>四の戸部尚書<sub>を</sub>あら<sub>は</sub>り。又<sub>は</sub>び<sub>と</sub>び<sub>と</sub>う<sub>る</sub>人<sub>を</sub>出<sub>す</sub>。鄧芝<sub>を</sub>畠<sub>や</sub>書院<sub>に</sub>入<sub>て</sub>半日を<sub>か</sub>。間<sub>だ</sub>談<sub>る</sub>。今天下三分<sub>して</sub>。鳥<sub>の</sub>とく<sub>よ</sub>峙<sub>の</sub>栗<sub>を</sub>。をあら<sub>う</sub>漢の正統<sub>を</sub>。又<sub>は</sub>一<sub>つ</sub>吳魏<sub>を</sub>伐<sub>く</sub>。天下<sub>を</sub>一統<sub>せん</sub>。わ<sub>か</sub>り<sub>き</sub>。先<sub>は</sub>何<sub>の</sub>國<sub>を</sub>伐<sub>く</sub>。論<sub>ぢ</sub>る<sub>は</sub>。魏<sub>へ</sub>漢の逆賊<sub>を</sub>。あら<sub>ど</sub>。又<sub>は</sub>愚意<sub>を</sub>り<sub>う</sub>。論<sub>ぢ</sub>る<sub>は</sub>。魏<sub>へ</sub>漢の逆賊<sub>を</sub>。あら<sub>ど</sub>。又<sub>は</sub>勢<sub>ひ</sub>甚<sub>じ</sub>。大<sub>き</sub>く<sub>は</sub>。今<sub>は</sub>主上<sub>を</sub>ト<sub>と</sub>。寶位<sub>を</sub>昇<sub>る</sub>。民の心<sub>を</sub>安<sub>ら</sub>ぐ。封<sub>す</sub>。今<sub>は</sub>主上<sub>を</sub>ト<sub>と</sub>。寶位<sub>を</sub>昇<sub>る</sub>。只<sub>は</sub>時<sub>を</sub>待<sub>て</sub>。よが<sub>く</sub>と。宜<sub>く</sub>。吳の孫權<sub>と</sub>好<sub>く</sub>結<sub>婚</sub>。唇齒<sub>の</sub>交<sub>を</sub>。先君の旧怨<sub>を</sub>。弃<sub>き</sub>。あら<sub>と</sub>乃<sub>ち</sub>長<sub>え</sub>の計<sub>を</sub>。あら<sub>ん</sub>孔明<sub>笑</sub>りて曰<sub>く</sub>。是<sub>は</sub>

と思ひと久。未だその人を得ざると憂ひ。今日方々  
あひて得とり。鄧芝が曰く。丞相あん人をう得づよぞ。孔明が  
曰く。不辱君命可レ謂士。御辺よりあらざんを叶ほ。鄧芝  
曰く。某才浅く。智薄にて。もろく丞相の大用。又負うん。  
孔明が曰く。ヨリ明日天子又奏。御辺を請て。吳を使うち  
志やん。鄧芝が曰く。捨てのびんを必ず行ふ。宜えよ。次乃  
日孔明朝々上て。後主又奏。鄧芝を使として。吳を行ふ。

繪本通俗三國志六編卷之三終

